



求める児童像

○進んで学ぶ子

○やさしい子

○がんばりぬく子

大切にすべきもの ～童謡「しゃぼん玉」に学ぶ～

先日、校区の公園近くを運転していると、仲の良い姉弟が澄み切った秋空に向かってしゃぼん玉を飛ばしていたので車を止め、その様子を見ていました。

風に乗って飛んでいく様は、大人の私にとってもうれしくなる情景です。太陽に照らされた虹色の丸い玉が秋風に乗れ、ふんわりゆらゆらと舞い上がっていき様子。無数のしゃぼん玉を必死で追いかける無邪気な子どもたちの姿・・・その様子は私たち大人にとって、子どもの頃の自分を重ね、どこか懐かしくさせるものでもあります。



そんな時、口をついて出るのが童謡「しゃぼん玉（1920年発表）」です。

この歌は、作詞野口雨情、作曲中山晋平の作品です。しゃぼん玉を飛ばす子どもたちの姿にこの歌を重ねてみると、日本の歌として情緒豊かな思いに駆られます。

ただ、この歌には次のようなエピソードが隠されています。

野口雨情は、明治41年（1908年）3月に長女「みどり」ちゃんをもうけますがわずか7日で亡くなってしまいます。その後大正13年（1924年）9月、雨情は作曲家の中山晋平らと徳島県での演奏旅行中、今度は二女の「恒子」ちゃんが疫痢（赤痢菌が腸に感染することが原因で起こる感染症）で急死し、悲しみに暮れます。

ある日、村の子ども達がしゃぼん玉をしているのを見た雨情は、「娘が生きていれば今頃は、娘はこの子らと一緒に遊んでいただろう」と思いながらペンを走らせ、中山晋平が曲を書いてできた作品が童謡「しゃぼん玉」です。

「屋根までとんで こわれて消えた・・・」

小さな命が消えてしまった。生命って何てはかないのだろう…。とうたい、

「とばずに 消えた 生まれてすぐに こわれて消えた・・・」

と、いと子へ向ける父親の、どうすることもできない切なさを綴っています。

そして、**風風ふくな しゃぼん玉とばそ**

と、わが子ならず、この世に生を受けた命が、無常の風に吹き消されることなく成長して欲しいとの切なくも強い、愛情に満ちた願いをうたい上げています。

しゃぼん玉
しゃぼん玉 とんだ
屋根までとんだ
屋根までとんで
こわれて消えた

しゃぼん玉 消えた
とばずに消えた
生まれてすぐに
こわれて 消えた

風風ふくな
しゃぼん玉とばそ

童謡「しゃぼん玉」は、一般的に明るい歌として口ずさまれる名曲ですが、その裏にあったのは、人生を謳歌できぬまま、「生まれてすぐに こわれて消えた」小さな命への鎮魂の願いと祈りだったようです。

「命は一つしかない」「命を大切に」・・・と、ども子も口にします。でも何か響いてこない…。

私たち学校現場に身を置く者の使命は、津留小の子どもを「理解する」から、「考え方を身につける」そして、「行動化できる」ようにすることです。それは、保護者と考えを共有しないと達成できません。

今年度本校では、道徳教育に力を入れ、全教職員で取り組んでいます。今こそ、「子どもの心」を育てたいと考えたからです。子どもの価値観は多様ですが、いつの時代も「失ってはならないもの」「誰もが大切にしなければならないもの」は、絶対に変わるはずのない「私も大切。あなたも大切な心」であることを毎日の教育で訴え続けます。子どもの明るい未来のために、一緒に言い続けましょう。「私も大切。あなたも大切」と。